#### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

空海とその書道論:「献梵字并雑文表」と「勅賜屏 風書了即献表」を中心に

マツダ, ウィリアム 四川大学外国語学院日文系: 副教授

https://doi.org/10.15017/4363576

出版情報:中国文学論集. 49, pp.46-64, 2020-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu

University バージョン: 権利関係:

## 空海とその書道論

# 「献梵字并雑文表」と「勅賜屛風書了即献表」を中心に

ウィリアム・マツダ

九~八二三)と橘逸勢(七八二~八四二)とともに「三筆」の一人に数えられ、能書家として名高い。そして「弘 する、まさにその開祖としても仰ぐべき偉人と言える。 力に圧倒される。そのほか空海の伝記類にも彼の書道の才能を讃える逸話が数多く存在し、彼は日本の書道を代表 二)に宛てた三通の書状「風信帖」などの流麗な書風に接すると、書道には門外漢であるわれわれですら、その迫 に残した真蹟に視点を移してみると、空海の大傑作の一つとされ、天台宗の開祖たる伝教大師最澄(七六六~八二 所)が流行したほか、「かな文字」を創造したとする俗説まで信じられた。その俗説の真偽はさておき、空海が実際 書道史に深い足跡を残している。江戸時代には、空海に所縁ある四国の寺院を巡礼する「お遍路」(四国八十八箇 法も筆の誤り」や「弘法筆を選ばず」といった現代に伝わる諺からも明らかなように、日本文化史、とりわけ日本 日本の真言宗の開祖たる弘法大師空海(七七四~八三五)は、周知の通り嵯峨帝(七八六~八四二、在位は八〇

十分に可能ではあるが、 録もみられない。 が書道の技能に真正面から論じようとしたものは存在せず、独自の流派を創設して弟子に書道を伝授したという記 という「芸術」の形成に対して、如何なる理論的な影響を与えたのだろうか。管見の限り、現存する文献には空海 のであろうか。現存する空海の真蹟によって、彼が相当な技術を有していたことは疑いないが、後世の「日本書道」 しかし、この評価は実際に空海が書き残した文章、つまりその理論面においてどこまで裏付けることができるも 確かに現在空海について継承されてきた幾つかの伝記的記述によってそれらを脱構築することは 私はここで彼の詩文集『遍照発揮性霊集』に収められた二篇の「上表文」(臣下から天皇に

宛てた書簡)を取り上げてみたい。これらは当然ながら中国の伝統思想や仏教の影響が強く、 れたいわゆる「日本書道」の考え方からは大きく乖離していると言わなければならないが、空海による日本初 その肉声に迫ることができるような期待を抱かせる。これが本稿を草する所以である。 のちの時代に形成さ

# 仏教の宇宙観と文章経国思想の折衷による書道論 ―― 「献梵字并雑文表

ばならない。 宗教者の空海がなぜ書道論を唱えたのか。 この経緯を説明するには、 まず空海と嵯峨帝との関係を明らか ľZ せ ね

ずか二年で費やしてしまい、予定より早く日本に帰ったことに対する懲罰だったとか、あるいは平城帝が空海 たらした新しい仏教に関心を示さなかったなど諸説あるが、いずれにせよ平城帝が病気のために皇太弟の神野親王 が許されず、到着地の筑前博多に三年間の逗留を余儀なくされた。その理由については、二十年分の留学資金をわ 、嵯峨帝)に譲位するまで帰洛できなかったのは事実である。一方、嵯峨帝は中華思想に熱心に傾倒しており、 八〇六年、唐より帰国した空海は、時のみかど平城帝(七七四~八二四、在位は八〇六~八〇九)によって入京 即位 のも

空海は晴れて都の西北郊外の高雄山寺に入住を認められた。高雄山寺は現在の神護寺のある場所で、 専念するには理 京からはかなり離れていたが、唐より輸入した密教を体系化し、その教義と実践を普及させる基盤を拵える作業に 八〇九年七月、 想の場だったといえよう。 和泉国(大阪府南部)槇尾山寺まで来ていた空海に、念願の入京を許可する太政官符が下った。 華やかな平安

後すぐさま空海を畿内に呼び寄せた。

もらっている関係上、帝の依頼を断るわけにはいかなかったのも事実だったであろう。 れらの製作は修行の妨げであり、少し面倒に感じていたふしもあるが、彼の入京を支持し、その宗教活動を認めて 「峨帝は高雄山寺に使者を頻繁に派遣し、空海にさまざまな書道作品を誂えるように命令した。 空海にとってそ

幾度も命令に応じて書道作品を製作し、 その都度上表文を添付した空海だが、 彼の書道論が初めて明かさ

空海とその書道論

- 47 -

## 国文学論 四十九号

れたのは八一四 考察を始めるが、本稿では便宜上この文章を五つの段落に分けて読み進めてゆく。また対句部分を明示するため、 に梵字の故事を巧みに織りなすというストラテジーを採用していたことが窺える。 認めさせようとするものだったことである。 には依頼された中国の書道作品(雑文)を進呈するものでありながら、同時に献上する「梵字」の作品の優越性を ものであった。 の文章は 書帖の事実上の優位を無視するのは政治的に危険だったと考えられるので、空海は中国の歴史観に基づいた 「物語」 嵯峨帝が空海 天皇に進呈する際に上表文を添付するのは通常であるが、ここで注目したいのはこの文章は表向 年 (弘仁五年)閏七月に進呈した「献梵字并雑文表 ?に当時中国で評価の高かった書道の名品の幾つかを実際に書いてみせよとの命令に応える しかし漢籍の教養が社会の基礎をなしていた平安初期の京では、 (梵字ならびに雑文を献ずる表)」であった。 さっそく上表文の冒 頭部分から 中 崮

韻文形式に準じて改行を施して掲示している。 沙門空海言。 空海聞、

皇風動地、 帝道感天、 則祕錄必顯 則靈文聿興。

故能龍卦龜文、 書虎字、 候白姫 待黄犧以標用、

於焉結繩廢而三 刻木寢以五典鬱興 一墳燦爛

明皇因之、 蒼生仰之、 而知 而弘風揚化 往 ·察来。

稽古溫故 不因聖智、 不出戸庭、 自我 萬里對目 三才窮數。 垂範

書而

三何矣。

書に非ずして何ぞや。

沙門空海言す。 天に感ずれば、 空海聞くならく、 則ち秘録 必ず顕

地を動かせば、 則ち霊文 黄犧を待ちて以て用を標し、 聿めて興ると。

亀文は、

故に能く龍卦 に於て 虎字は、 結縄廃れて而して三墳は燦爛とし、 白姫を候ちて以て体を呈す。

明皇 刻木寝んで以て五典は鬱として興れり。 之に因りて、 往を知り 風を弘め 化を揚ぐれば、 来を察す。

戸庭を出でずして、 之を仰ぎて、 万里は目に対し、

ŋ

聖智に因らずして、 故きを温 ね 三才は数を窮めたり。 我 より範を垂る、

(「献梵字并雑文表」その第一段、『遍照発揮性霊集』巻第四所収)

換言すると帝王と天の間には中国の伝統的な形而上学が賛美する「感応」の状態が成立しているのである。 空海もおそらく出家前に培った教養に属するものであろう。 秋左氏伝』(昭公十二年)に見えるが、この典籍は平安初期の律令国家の教育カリキュラムにも組み込まれてお て徳政を行う帝王が次々に現れ、その歴史が「三墳五典」の書籍として蓄積され、またそれを利用して、英明な君 うな上古の原始的な情報媒体を略することができ、より正確な意思疎通を図ることが可能になったのである。そし 文字の普及によって、紐や縄などの結び目を用いて情報の記録・伝達や計数・演算を行う「結縄」や「刻木」のよ に感応して出現した「龍卦亀文」の故事を用い、文字の出現が帝王の系譜に緊密に繋がっていることを暗示する。 まり 合うのである。すると、その時点まで人間の目に見えなかった「秘録」が形を顕わし「霊文」がもたらされる。 不朽の盛事なり」の理念が窺われる。「帝道感天」という句は、 の仁徳が欠如しているとこの世に露呈しないのである。つづいて「三皇五帝」の神話伝説の中から黄帝と伏羲の徳 (明皇)は「弘風揚化」つまり道徳をひろめ庶民を教化してゆくのである。因みに「三墳五典」という語は 頭には三国魏の文帝 秘録」と「霊文」という語句からわかるように、「文」という現象には神秘的な性質が付与されており、 ∖地」にも同じレトリックが繰り返される。こんどは帝王の美しいふるまい(皇風)が大地の精霊と響き (曹丕、一八七~二二六)の文学評論「典論論文」にみえる有名な「文章は経国の大業 帝王の正しい政治が天徳に通じていることを指す。 次の上 ŋ

と帝王の徳政が如何に緊密に結びついているかを主張した。しかし、この上表文の真の目的は天皇に梵字の書を献 空海はまず儒教思想の枠組みに基づき、漢籍において常識的に扱われた幾つかの故事を踏まえつつ、文字の出 梵語の霊威を認めさせることであるため、次の第二段落では、 彼は巧みに視点を切り換え、

復悉曇之妙章、梵書之字母、 體凝先佛、理含種智、 字絡生終、用斷群迷。 の魅力を訴えてゆ

字は生終に絡ひ、用は群迷を断たん。体は仏に先んじて凝り、理は種智を含み、

況や復た

悉曇の妙章、

梵書の字母は

#### 中国文学論 第四十 九号

所以三世覺滿、 尊而

十方薩埵、 半偈難報 重逾身命。

纍劫之障、 一念易斷

ここにはインドにおいて悉曇文字(梵字)が成立した経緯が説明されている。 文字之義用、 大哉、遠哉。

所》 以 🏖 十方の薩埵、 に三世の覚満、 重んずること身命を逾ゆ。 尊びて師と為し、

満界の宝、 半偈にも報い難く、

累劫の障、

文字の義用は、大なる哉、遠き哉。 一念もて断じ易し。 (「献梵字并雑文表」その第二段

想においては人間世界の帝王の枠組みに従属する漢字とは異なり、悉曇文字には て悉曇文字と漢字のそれぞれの成立背景を並記することで、悉曇文字の優越性が明らかにされる。そして、 内包するという。そして「字絡生終」つまり宇宙の始まりと終わりとを結びつける永遠のものなのである。こうし |性が備わっていることが暗示される。第三段はいよいよ嵯峨帝その人に言及する。 国家 という概念を超越した普

先仏」つまり釈迦の出現以前より授かったものであり、「種智」すなわち時空を超えて存在する一切の全知全能を

空海の主張によると、悉曇文字は

伏して惟みるに 皇帝陛下は、

伏惟皇帝陛下、

三に貫きて号を表し、五に減じて首を称し、

露は文下に沈みて、 道は規矩に邁れ、明は烏兔に斉し。 六合は無為、

は琴上に動きて、一人垂拱す。

玉燭調和、 風動琴上、

金鏡照耀 一人垂拱。 露沈文下、

六合无爲、

道邁規矩、 貫三表號、

減五稱首 明齊烏兔。

所謂輪瑞之運、于今見矣。

所謂輪瑞の運、于に今見れり。玉燭調和して、金鏡照耀せり。

一献梵字并雑文表」その第三段

注目したいのはここではまた再び中国の漢字の枠組みに戻って論述が進んでいることである。日本の天皇が中国 「王」として描写されており、その存在は「三」の字に垂直の線で貫かれるように (つまり 「王」字) 天・地

本の君主を中華思想の枠組みにおいて理論付けている。漢字の形で王の徳を論じることで、天皇を宇宙の現象に繋 人を徳政で統一するとされている。つづいて「五」の字から線を一つ減らすとまた「王」の字形になるように、

がるものとして賞賛している。天皇は正に中国の皇帝と同じく「文章経国」 調となり、天下に完璧な秩序がもたらされるのである。「金鏡照耀」については、岩波古典大系の解説(二四三頁) まることを指す。そして最終的に「玉燭調和、金鏡照耀」とあるように春夏秋冬の移り変わりと月の満ち欠けも順 通り「帝王が衣を垂れ手を拱く」という意であり、これもまた「無為」と同様に天下に徳政があれば自然に世が治 機能していれば君主が何も作為的なことをせずとも天下は自ら治まる状態が導かれるのである。「一人垂拱」も文字 文の創造をもたらすという解釈で一致している。この発想は次の「六合無為」に展開する。すなわち文字が正しく については、典拠は不明なものの、 して天皇の徳は「規矩」のように永久不変の存在であり、夜空に懸かる月(烏兎)のように輝かしい。「露沈文下」 『遍照発揮性霊集』の各訳注においては露が草木に潤いを与えるように徳政が達 の理念を体現するものなのである。

天下の相関性を論じてきた。しかし最後に彼は「輪瑞之運」と、咄嗟に仏教の語彙を持ち出し、天皇を「転輪聖王 では「明道の喩え」とあり、また筑摩空海全集(二八五頁)では「天子の徳化は金の鏡の照り輝くよう」とあるよ 若干象徴的な意味合いも付与される。ここまで空海は律令体制が唱える中華思想のロジックで君主・文字

ための空海の政治的なストラテジーといえよう。次の第四段落にも、悉曇文字と中華の言語観とを結び付けようと 宙観にも同時に位置づけるようとするのは、 (梵語 cakravartin)つまり仏法が繁栄する時代を迎える理想の王として表現する。天皇を中華思想とともに仏教の字 既存のイデオロギーを否定しているのではないかという非難を逸らす

空海、人是瓦礫、毎仰金仙之風、

する空海の苦心が窺える。

茶湯坐來、乍閲振旦之書。 窟觀餘暇、時學印度之文、 器謝巢許、久臥堯帝之雲

未嘗不野心忘憂、山情含笑。毎見蒼史古篆、右軍今隷、

空海とその書道論

茶湯に坐し来たりて、乍ち振旦の書を閲す。窟観に余暇ありて、時に印度の文を学び、器たるや巣許を謝し、久しく尭帝の雲に臥せり。器かるや巣許を謝し、久しく尭帝の雲に臥せり。空海、人たるや是れ瓦礫にして、毎に金仙の風を仰空海、人たるや

務光が韭葉、杜氏が草勢を見るに、毎に蒼史が古篆、右軍が今隷、

未だ嘗て野心に憂ひを忘れ、山情に笑みを含まずんばあらず。

有諺曰、 奴口甘、 郎舌

敢因斯義、

欲獻久矣。

甜

諺有りて曰く、「奴の口に甘きは、 郎が舌にも甜からん」と。

敢へて斯の義に因りて、 献ぜんと欲すること久し

うな器量も無いが、ただ一途に仏法の修行に専念し、帝王「尭」のごとき嵯峨帝の恩恵を蒙っているという。日本 の天皇を中華の時空軸の中に位置づける巧みな「修辞的な戦略」が採用されていることが見て取れる。しかし空海 ここはまず空海自身の謙遜の言葉から始まる。「瓦礫」に等しく取るに足りない私は、伝説の隠者巣父や許由のよ 「献梵字并雑文表」その第四段

閲覧すると述べ、ここでもインドのものと中国のものとが同列に扱われている。だが再び直ちに中華思想の視点に テクストを読み、「茶湯坐来、乍閲振旦之書」とあるように、寛いでお茶を喫する時には「振旦之書」つまり漢籍を 時学印度之文」と、仙人のように洞窟で修行に励む合間には「印度之文」すなわち梵字で書かれた

とされる蒼頡を元祖とし、つづいて「右軍」と称された書聖の王羲之(三〇三~三六一)、風にそよぐ韮の葉をみて 戻り、中国の著名な能書家を列挙する。先ず、黄帝の史官であり、動物の足跡から着想を得て「古篆」を考案した 倒韮隷」という字体を発明した務光仙人、そして草聖として知られる後漢の杜伯度が順次登場する。しかし悉曇文

有用性と優越性を主張したい空海の意志は、次の最終段落まで続いてゆく。

還恐觸塵聖眼 然れども猶ほ狼藉汚穢にして、還た塵を聖眼に触れんことを恐れ

然猶狼藉汙穢、

微誠潛達、

先聞于天。

伏して布勢海が口勅を奉じて欣踊し、微誠 潜かに達して、先づ天に聞こる

先づ天に聞こゆ。

及び「梵字悉曇」等の書 古今文字の讃」、右軍が「蘭亭の碑」、 都て一十巻を繕装し、

敢へて以て奉進す。

繕裝古今文字讚、 伏奉布勢海口勑欣踊

右軍蘭亭碑、

及梵字悉曇等書都

一十巻、

伏願陛下 伏乞天慈不嫌涓滴 覧飛塵

敢以奉進

披梵字、 梵天之護森羅

たび梵字を披かば、

梵天の護り

森羅たらん、

伏して乞ふらくは天慈 して願はくは陛下、 涓滴を嫌はず、 飛塵を一覧したまへ。

- 52 -

|関神書 神人之衞

達水遙浦 忽入封壃

嵩山敻岫 來受正朔。

常住之字、 加持不壞之體、

遂古之民 鳳祥名職 龍瑞紀官 永豫姑射、 擊耕于今辰矣。 放曠金閣

沙門空海、 輕黷旒扆 誠惶誠恐謹言。 伏深戰越。

古今篆隷文體 古今文字讚三 卷

梵字悉曇字母幷釋義

梁武帝草書評 -- 卷

曇一律師碑銘 王右軍蘭亭碑 一卷章書 卷

大廣智三藏影讚一卷

嵩山 達水の遥けき浦 [の夐けき岫、 忽ち封壃に入り、

再たび神書を閲すれば、

常住の字は、 不壊の体を加持し、

遂古の民、 今辰に撃耕せん。

鳳祥 龍瑞

軽しく旈扆を黷すこと、伏して深く戦越せり。

沙門空海、

古今文字の讃

古今篆隷文体」一巻

王右軍の蘭亭の碑」 巻

曇一律師碑の銘」一 巻章書

弘仁五年閏七月廿八日沙門空海進。

び彼らの作品こそが でに添付したかのように見せかけている。 み取れる。 見すると単なる社交辞令、美辞麗句の羅列に思えるが、ここにも梵字の優越性を主張しようとする空海の戦略 中国歴代の能書家の傑作を嵯峨帝に「奉進」するのがこの上表文の前提であり、梵字の文献はつい 「前置き」に過ぎず、 空海は漢籍とインドの文献とを交互的に登場させ、それらを対等に取 しかし実際に上表文の文言を注意深く考察してゆくと、中国の能書家及

が読

空海とその書道論

- 53 **-**

神人の衛り 逼側せん。

来たりて正朔を受けん。

官に紀されて、永く姑射を予うし、

りゅういいけが、職に名づけて、 金閣に放曠せん。

誠惶誠恐して謹言す。

卷

梵字悉曇字母并びに釈義」

三三巻

梁武帝の草書の評」一巻

大広智三蔵影の讃」一

弘仁五年閏七月二十八日 沙門空海進めたり。

「献梵字并雑文表」その第五

## 第四十九号

上げつつも、 うことである。 天の加護が得られ、 明した中国 りこの世で仏の恵みを受けることの視点から梵字の有用性と利便性を説いているのである。 海が中国の能書家を「神人」として神格化したのは、彼らをインドの「梵天」と同列に位置づけたい為であるとい 神人之衛逼側」と、 [の文字(篆書・隷書)もまた梵字と同格の「神」として崇められるのである。 結果的には後者の神秘性を強調している。例えば「一披梵字、梵天之護森羅」梵字の経典を読めば 空海は仏教の優越性を論じるに際して、その哲学的な側面にはあまり頼らず、寧ろ現世利益、つま それは「森羅」つまり日本全土に及ぶという。 漢籍にも「神書」として国家を護衛する力があるという。ここで注目したいのは、 だが、これはもちろん中国の作品も同様で、「 これによって蒼頡が発

く説明する必要があった。結果的に奇しくもそれが日本の書道論のいしずえを築いたといえよう。 日本初の書道論となったこの上表文は、実は嵯峨帝に梵字の優越性と有効性を主張するために書かれたものであ しかしそれを当時の平安京の文人たちに理解させるためには、中国の基本的な文字とその書体の歴史を順序よ つ

## 哲学としての書道論へ―― 「勅賜屏風書了即献表

\*\*\*\* 名な詩句を屏風に書くこととなり、上表文「勅賜屏風書了即献表并詩名な詩句を屏風に書くこととなり、上表文「勅賜屏風書了即献表并詩 并せたり)」を進呈した。この文章は前掲「献梵字并雑文表」の記述を一部踏襲しつつも、こんどは形而上学的な視 点も加えられている。ここでも便宜上、 するに留まるものであった。その二年後の八一七年 (弘仁七年)、空海は再び嵯峨帝の命で、 節で取り上げた 「献梵字并雑文表」は、 八つの段落に分けて読み進める。 書道の抽象的な側面 にはあまり触れず、 (勅賜の屏風に書し了り即ち献ずる表、 なお最終第八段は詩歌である。 ただ中国 中国における古今の 歴 代の能書家を列挙

錦 奉宣聖旨、 緣五尺、 令空海書兩卷 屛風四帖、 到山 房

沙門空海言。去六月廿七日

殿助

布勢海、

將五彩呉綾、

主殿助布勢海、沙門空海言す。 聖旨を奉宣すらく、 の縁五尺なる、 五彩の呉綾 屏風四帖を将ちて、 一空海をして両巻の Щ 房に到り来れり。

去んじ六月二十七日

今詩人秀句者。

忽奉天命、

空海聞、 物類殊形、 事

車別用、 事則通快。

用失其宜、 元耽觀牛之念、 雖勞無益。

久絕返鵲之書。

終日修心、 達夜數息、 誰勞穿被、 何能墨池。

欲辭不能 人非曹喜、 謬對漢主之邸、

が展開される。

古今の詩人の秀句を書かしむる者なり」と。

驚悚すること喩へ難し。

忽ち天命を奉じ、

舟車は用を別にして、文武は才を異にす。 空海聞くならく、 物類は形を殊にし、 事群は体を分か

其の宜しきを失すれば、 其の能に当つれば、 事は則ち通ずること快し。

元より観牛の念に耽

労すと雖も益無し、

久しく返鵲の書を絶つ。

数息すれば、

誰か穿被に労せん、

曹喜に非ず、 心を修むれば、 謬ちて漢主の邸に対ひ、 何ぞ能く墨池せん。

辞せんと欲して能はず、強ひて龍管を揮へり。

八七~五五一)「謝東宮古跡啓(東宮の古跡を謝する啓)」に見え、「穿被」は、 ろに高野山下賜の許可が下りたので、 行に専念し、唐から持ち帰った密教の体系化に取り組んでいる空海にとっては、書道のような芸術活動に時間を割 を開けてしまったという魏の鍾繇(一五一~二三〇)の故事を指す。つづく「墨池」も、 しまうほど没頭した後漢の張芝(号は伯英、 頭にはやはり「忽奉天命、 のだが、 「返鵲」は書道における自在な文字の筆勢をいう言葉(鵲反鸞鷩)として、六朝梁の庾肩吾 嵯峨帝の依頼はやはり無碍には断れず、しかも中谷征充が指摘するように、 驚悚難喩」 嵯峨帝もその見返りにこの屛風への揮毫を命じた可能性が十分有り得るので など空海の謙遜の辞が配されるが、 ?~一九二)の故事に基づくものである。「観牛の念に耽」って仏道 「勅賜屛風書了即献表」その第一段、『遍照発揮性霊集』 寝ている間も掛け布団に字を書き穴 つづいては彼の書道に関する豊富な 池が墨で真っ黒になって ちょうどそのこ

空海とその書道論

かくして上表文は、

次に本格的に書道の理論的な側面の論述に入ってゆく。

く余裕は無い

## 第四十 九号

非但以結裹爲能

必須遊心境物、 取法四時、 散逸懷抱、

以此爲妙矣。

古人の 『筆論』に云く、「書は散なり」と。

但だに結裏を以て能と為すのみに非ず、

必ず須らく心を境物に遊ばしめ、 懐抱を散逸し、

此を以て妙なりと為さん。 法を四時に取り、形を万類に象るべし、 (「勅賜屛風書了即献表」その第二段

岩波古典大系(二一〇頁)が注釈で指摘するように「書道の極意は心を万物に散じて、万物の形を字勢に込める所 しようとしたと考えられる。 ない。このように『筆論』を引用することによって、空海は日本における書道の実践にも形而上学的な性質を付与 にある」ということ。ただやみくもに筆を揮って「結裹」即ちトメやハライがうまく出来るだけでは書道とは言え 注目したいのは空海が後漢の蔡邕(一三二~一九二)『筆論』を引用していることである。「書は散なり」とは、 万物の神髄を把握しようと心を落ち着かせ、その対象物から得られたエッセンスを文字の形に再現せねばなら つづいては「献梵字并雑文表」で列挙した能書家たちが再び登場し、 書道の歴史が

ぶさに語られるのである。 是故蒼公風心、 擬鳥跡 而揮翰

王少意氣、 想龍爪 而染筆、

垂露懸針之體、 軒聖雲氣之興、 務仙風韭之感、 鶴頭偃波之形

竝皆人心感物而作也。 如是六十餘體者

麒

最

初初

やはり鳥の足跡から着想を得て漢字を発明した蒼頡

(蒼公)

蛇字起唐綜、 蟲書發秋婦

麟鸞鳳之名、 瑞草芝英之相

是の故に蒼公が風心は、 王少が意気は、 龍爪を想ひて筆を染め、 鳥跡を擬して翰を揮ひ、

蛇字は唐綜より起こり、 虫書は秋婦に発せり。

垂露懸針の体、軒聖が雲気の興、 鸞鳳 ||の名、 鶴頭偃波の形、務仙が風韭の感、

是くの如き六十余の体 びに皆な人の心の物に感じて作れるなり。 は

の伝説で始まる。 勅賜屛風書了即献表」 その第三段) けれども空海は今回、 蒼頡

を単に文字の祖として崇めるだけでなく、文字が創作されたのは蒼頡の「風心」によるものだと主張する。 ことで書道を精神的な次元に昇華させ、その実践に芸術的な性質を付与するのである。蒼頡につづいては、 **筆論』を引用して書道の実践に形而上学的な枠組みを与えたことを受け、ここでも「風心」という概念を喚起する** 気に下り、東晋の王羲之(王少)となる。王羲之というと、まず「蘭亭序」を思い浮かべることが多いが、今回

に当たり、蛇の身に繞ふを夢みて、寤めて之を作る」とある。また秋婦とは春秋時代に魯の役人だった秋胡の妻の綜の伝記に関しては不明な点が多いが、唐の韋続『墨藪』には「魯人(山東省出身)の唐綜は漢魏の間(三国時代) 海全集(二五五頁)に拠れば、唐の李綽(生没年不詳)『尚書故実』に見えるものだが、ある日王羲之が酔態のまま 組む際の精神的な要素を重視していることは注目してよい。次は唐綜の「蛇字」と秋婦の たため、その対句として同じ「生き物」の「龍爪」が配されたのだが、ここでも王羲之の「意気」つまり書に取り 書いた文字が「龍の爪」に似ていたので「龍爪書」と呼ばれるようになったという。蒼頡の故事が「鳥跡」 はそれには一切触れず、彼は王羲之に関する逸話を紹介して能書家の系譜を構築してゆく。その逸話とは、 「虫書」が登場する。 筑摩空

ことで、同じく『墨藪』に拠れば、蚕のはき出す糸を束ね(つまり絹糸を紡いで)、刺繍で旅先の夫に手紙(虫書も は中華文明の祖である黄帝(軒轅皇帝)。その「雲書」の実態は前節に挙げた「献梵字并雑文表」にリストが として書の歴史が語られたのである。次の句からは一転して大空へと視点が転換する。「軒聖」とは、漢民族 『古今篆隷文体』に示されている。一名『篆隷文体』。斉武帝(四四〇~四九三)の次男に当たる竟陵王蕭子良 しくは蚕書)を出したという。鳥の足跡、龍の爪、蛇、そして木の葉からぶら下がる蚕といった「動物相」を主役 んみえた

の発明による風にそよぐ韮 の形を模して黄帝みずからが創造した書体であるという。その対句には、 六○~四九四)によって撰述された書体資料集である。その説明によれば、太平の世に現れるという「卿雲 (慶雲)」 (韭)の葉の字体の話が配置されるのである。 地上に戻り、 前節にも登場した務光仙

代のズレが認められるものの、 空海は何故このように中国の歴代能書家と彼らの創造した字形の名称を並べて述べることにしたのか。 書はただ単に筆を揮って紙に字を書く「作業」だけではなく、 |書] という営為に |歴史] と |系譜] を与えることに意図があったと考えられる。 東アジア文化の源泉たる中国の皇帝と半伝

空海とその書道論

## 第四十九号

築する必要があるのか、 説的な能書家まで遡る、 海が密教を伝授された経緯に求めてみたい。 (金剛界と胎蔵界)を伝授されると、その教義と儀式を教わったのみならず、大日如来を第一祖とする真言密教 「系譜」にも編入されたのである。空海は、このような系譜こそが自らの正統性を立証する重要な役割を果たす という一つの疑問が浮上してくる。 聖なる営みだと主張しようとしているのである。そうは言っても、ではなぜ「系譜」 空海は在唐時に青龍寺の恵果阿闍梨 推測の域を出ないが、筆者が思うには、その動機を空 (七四六~八〇六) より密教の を構

譜のみで成り立つものではない。言うまでもなく、実際に筆を手にとり、筆先を墨汁に浸し、それを紙に押し付け ようとする瞬間に「書」が成立するのである。次の段落で空海は、書の技術的な側面に言及する。 ここまで、空海は書道の形而上学的な基礎、 系譜、 歴史を確定しようとした。しかし、 書の傑作は形 而上学と系

ことをここで身を以て経験していたのである。

詩是有調聲避病之制、 或曰、筆論筆經、譬如詩家之格律。 詩に声を調へ 或るひと曰く、 「筆論 筆経は、譬へば詩家の格律の如し」と。 病を避くるの制有り、

書も亦た病を除き 書者も 声と病を解せざれば、誰か詩什を編まん、 病と理に明らかならざれば、何ぞ書評に預 理に会するの道有り。

書者不明病理、 詩人不解聲病、 書亦有除病會理之道。

何預書評。 誰編詩什、

書も亦た古意に擬するを以て善と為し、 古詩を写すを以て能と為さず、 詩を作る者は、古体を学ぶを以て妙と為し、

所以に古よりの能書は、百家に体別れ、古跡に似せるを以て巧と為さず。

所以振古能書、

百家體別

良有以也。

書亦以擬古意爲善 不以似古跡爲巧。

不以寫古詩爲能 以學古體爲妙

大いに笑ひ、鍾繇 深く歎ずるも、良に以有るなり。 一勅賜屛風書了即献表」その第四段

の技術論に当たって、 空海は中国の詩歌創作における 四声八病」 説を取り上げ、 書道論も「格律」すなわ

書道

残念なことに、実際に書道にどのような「病」があるのかについての言及はみえないが、この一節では空海 ち「決まり」(格)と「 践における神髄を述べた。これは後漢末から三国にかけての書家蔡邕(蔡雍)や鍾繇ですら、 な模倣に留まってはいけないと戒めている。この段落では、詩論の考え方に基づいて書道論の構築を試み、 てきた「百家」を数えるさまざまな意匠 イル(体)を学ぶことによってそのエッセンス(妙)を習得するように、書も「以擬古意為善」古くから伝承され 徹底的に習得し、実践に生かさねばならないのである。そして詩歌が「以学古体為妙」とあるように伝統的 詩と同列にしようとしていることがわかる。書は詩と同様に規律を尊ぶべきで、能書家になるためにはこの規律を の重複を回避するなど禁忌 (病) が定まっているが、空海はその概念を書道にも当てはめようとしているのである。 基準・掟」(律) を理解しなければならないという。詩歌には平仄の調和や同じ発音の文字 (意) を積極的に吸収すべきであって、ただ既存の作品 容易にはたどり着く (古跡) の表面 その なスタ が書を

空海、儻遇解書先生、粗聞口決、なことができなかった境地なのである。

折六書之萃楚、摘八體之英華。賴聖雷之震響、拔心地之蟄字、雖然所志道別、不曾留心。

學轉筆於鼎態、

.水而擺撥

法老少而始終。擬超翰乎草聖、

今 聖雷の震響するに頼り、心地の蟄字を抜きんじ、然りと雖も志す所の道別れて、曽て心に留めざりき。空海は、儻ま解書先生に遇ひて、粗 口決を聞けり、

山水を想ひて擺撥し、老少に法りて始終す。転筆を鼎態に学び、超翰を草聖に擬し、六書の萃楚を折り、八体の英華を摘めり。

体を伝授されたプロセスに共通していよう。 い書道 なかったが、このたび雷霆の如き嵯峨帝からの依頼を受け、「六書」や「八体」といったさまざまな書の技巧が 空海の在 しかし注目したいのは の奥義を、 唐 時代の書道 空海が直接その師から教わったこと示している。この教授法は、空海が恵果阿闍梨より密教の全 の師 「粗聞口決」という箇所である。「口決」とは「口伝」を指し、いまだ文字化され (解書先生) の正体については、 しかしその後、 仏道修行を優先する空海はこのことを「心に留め」 諸説あるものの決定的な資料に乏しい のが実情 てい

空海とその書道論

## 中国文学論集 第四十九号

英の超絶した筆法まで、実にさまざまな技能に精通するものであったという。 :から目を覚ました (蟄)という。 それは 鼎 に鋳込まれた古代の篆書体の運筆から、 「草聖」と呼ばれた張伯

さて、このように書道の技巧とその歴史を述べたのち、 空海はいよいよ中国の伝統思想に依拠したその言語論 0

君臣風化之道、 含上下畫、 核心部分を開陳する。

客主揖讓、 夫婦義貞之行、 弟昆友悌、 藏陰陽點。

三才變化、 四序生煞。

尊卑愛敬、 隣里和平、 寰區肅恭。 大小次第、

雖功謝書池、 此等深義、 悉韞字々、 竊庶幾雅趣。

自外凡庸、 又夫右軍累功、 衆藝弄沙、 何解點畫之奥。 始會其極。 猶未得其妙、

> 風化の道は、 義貞の行は、 上下の画に含み、 陰陽の点に蔵せらる。

客主 揖讓して、 弟昆 友悌あり、

変化して、 四序 生殺す。

尊卑 変敬して、 次第あり、

隣里 此等の深義は、悉く字々に韞めり、 和平して、 寰区 肅恭たらん。

功を書池に謝すと雖も、 又夫れ右軍は功を累ねて、猶ほ未だ其の妙を得ざりしも、 窃かに雅趣あらんことを庶幾ふ。 ことを庶幾ふ。

自外の凡庸、何ぞ点画の奥を解せん。衆芸は沙を弄びて、始めて其の極みを会らん。

序(大序)」にも見えるものである。すなわち「得失を正し、 婦」「客主」「弟昆」(兄弟)といった二項対立的な関係の在り方を文字の点画に喩えている。こうして言語を正しく コントロールすることによって、天下のあらゆる人間関係を正すことができるという概念は、『詩経』冒頭の「毛詩 文字、そしてそれを扱う書道には社会的な秩序を保つパワーがあると空海は主張する。この一節では「君臣」「夫 |毛詩序| 是を以て夫婦を経し、 の精神を踏襲したことが明らかである。 孝敬を成し、 人倫を厚くし、 しかし、 天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは、詩より近きは莫 その内容をただステレオタイプに流用したのではな 教化を美にし、風俗を移す」と。空海の上表文はこ (「勅賜屛風書了即献表」その第六段)

先王

視覚的な書道の側面にも充てようとしたのである。要するに、空海は詩経が提唱する詩論によって「文章経国 の通り詩(そしてそれに付随する音楽)が如何に天下に平和をもたらすかを論じているのだが、空海はその概念を ロゴス中心主義から脱却して、より普遍的な思想を提唱しようとしたのである。 本来は詩論であった「毛詩序」の趣旨を書道の理論に転じたところに空海の独創性が窺える。「毛詩序」は周 知

空海は次のように上表文をしめくくっている。

何況空海、 耳聞其義、 心不存理

空費筆墨、 忝汙珍屏。

悚一 懼

心魂飛越。

于時、 堯曦流光、 自然之應、 對山握管 不覺吟詠。 觸物有興 葵藿自感。

伏乞天慈宥其罪過、 所書屛風及秀句本、 輒抽十韻、 幸甚幸甚。 隨表奉進。 敢書于後。

沙門空海、誠惶誠恐謹言。 輕贖聖覽、 伏增流汗。

弘仁七年八月十五日、

沙門空海上表。

空しく筆墨を費し、 何ぞ況んや たびは悚れ一たびは懼け、ましく筆墨を費し、
なたじけな 空海、 耳に其の義を聞くも、 くも珍屏を汚す。 飛越す。 心に理を存せず、

心魂

時に于て、尭曦 光を流し、葵藿 自ら感ず。

自然に 之れ応じ、覚えず 吟詠せり。山に対して管を握り、物に触れて興有り、 之れ応じ、覚えず

軽しく聖覧を黷せるは、伏して流汗を増さん。謹みて書する所の屛風及び秀句の本、表に随ひて奉進す。 伏して乞ふらくは天慈 輒ち十韻を抽きて、敢へて後に書す。 其の罪過を宥したまへ、幸甚なり

沙門空海、誠惶誠恐して謹言す。

弘仁七年八月十五日、 沙門空海上表す。

ここもまた自分の能力に対する謙遜の辞が羅列されている。けれども、この上表文で注目したいのは、さらに十 |勅賜屛風書了即献表」その第七段)

の詩が添えられていることである。 蒼嶺白雲觀念人 蒼嶺の白雲 観念の人

韻

等閑絕却草行真 等閑 に絶却す 真

空海とその書道論

ら仏道修行に励む私空海は、 白雲たなびく青山にあってひたす

瑞草秋冬感帝仁 豈謂明皇交染翰 祥雲濃淡御 鵠頭龍爪爲君陳 不顧揚波爾許春 心遊佛會不遊筆 青山翠岳見翔鳳 邸出 花 青苑山 瑞草 豈謂 鵠頭 揚波を顧みざること 心は仏会に遊びて 石の濃淡 品はんや は秋に冬に 翠岳に 龍爪 明皇 御 君が為に陳べんとは 翔鳳を見 邸より出 帝仁に感ず 染翰を交し 筆に遊ばず 爾許の春ぞ

切思相伴竭丹宸 更有懸針與 花苑瓊林望走驎 倒韭 切思 更に有り 瓊林に 相伴ひて 懸針と倒韭と 走驎を望む 丹宸を竭くさん

龍管臨 烏光忽照點豪奢 池 調漆墨 烏光 龍管 忽ち照らして 池に臨みて 漆墨を調へ 豪賓を点ず

此是君王 雨莫來汙 前愛珍 此れ 驟雨 来たり汚すこと莫れ 君王の愛珍する所なり

暴風驟

松巖數

畫虎畫龍都 恐汙望晴經月旬

霧菴中湿 汚るるを恐れ 敵に数ば霧ありて れは是れ 君王の愛 晴を望みて 菴中湿ふ

月旬を経るも

寒心暑幾逡巡 デ 似 画虎 画龍 心暑くして 都べて似ず 幾たびか逡巡せり

勅賜屛風書了即献表」その第八段

限りです。

雲」 「瑞草」 「懸針」 最後は上表文の内容を詩的に要約したものである。第一句から第四句までは、 このたびの帝からの依頼をまことに予想外であったことを述べる。 「倒韭」「龍管」「臨池」「豪篒 (=毫寳)」など書の字形やそれにまつわる故事を随処に散りば つづいて、「揚波」「鵠頭龍爪」 ひたすら仏道に専念している現状

を説明し、

勅書を頂戴し、幾つかの書体をお けなくも達筆の帝より素晴らし おりました。 にとめる暇も無く何年も過ごし 伝えすることになりました。これ 真 ところが此度かたじ の書道のことなど心

行

•

御所の花園には麒麟が現れること 備わり、 でしょう。それを願い丹精込めて 都の空には鳳凰が舞い で帝

の御筆には益々吉祥の運気が

書き上げました。幾日も山 雨で台無しになる恐れがあります。 め置きますと、 大切な御屏風が風 中に留

は虎を画けど虎でなく、 山の霧で湿り、 急いで書き上げましたが、やはり て龍にならず、 おまけに我が悪筆 誠にお恥ずかしい 龍を描

ためだったのではないかと考えられる。 を添えたのは、このような仏教的な修辞法を用いて自分の資格と系譜の正統性を強調し、 あったのか。これについては、仏教的なレトリックに由来するのではないかと提案したい。大乗仏教の経典にお ながら製作の様子をコンパクトに示す。空海は何故このように最後に詩歌によって上表文の趣旨をまとめる必要が その巻末に経典の趣旨を「偈」という詩歌の形で要約する場合が多い。 上表文の末尾に敢えて七言十韻の詩 嵯峨帝を十分納得させる

#### むすび

国思想、 のだと思われる。とはいえ、空海の提唱した書道論が日本の書道に初めて哲学的・歴史的・芸術的な基盤を与え、 することができなかったのである。このように、空海が主張する書道論は甚だしく平安初期の律令国家の産物であ かが窺い知れる。梵字の優越性と有効性を主張しようとした上表文においても、空海は文章経国の枠組みから逸脱 性は空海の芳醇な教養を反映するものであり、また当時、中華思想がいかに律令国家の基盤に重要なものであ 日本書道」という独特な芸術の形成に大いに貢献したことは否定できない事実といえよう。 故にそのシステムが崩壊した九世紀中葉以降、空海の書道論はやはり日本書道にあまり受け入れられなかった 仏教の言語観、そして『詩経』が提唱する文学論を折衷したものであると考えられる。この思想的 『遍照発揮性霊集』に所収の二篇の上表文を通じて、空海の書道論を考察した。それは中国伝統の文章経 つった

#### 注

空海とその書道論

 $\widehat{1}$ 文学大系71、一九六五年。以下、 『遍照発揮性霊集』の本文とその解釈については、渡邊照宏・宮坂宥勝 八一~一二六六)が書写した醍醐本 岩波古典大系と略称)を参照した。本書は鎌倉時代に東寺長者を務めた僧隆澄 (醍醐三宝院所蔵、 重要文化財)を底本に用いる。 『三教指帰 また必要に応じて今鷹真ほ 日本古典

## ·国文学論集 第四十九号

- 称)、中谷征充『漢詩を通じて弘法大師空海の生涯を繙く』(高野山出版社、二〇一一年)等を適宜参照した。 『遍照発揮性霊集』(宮坂宥勝編『弘法大師空海全集』第六巻、筑摩書房、一九八四年。以下、筑摩空海全集と略
- $\widehat{2}$ 藤瀬礼子「『性霊集』にみる空海の書論について」(『了徳寺大学研究紀要』第三号、二〇〇九年)その三六頁。
- る旨を示すが、『書史会要』は明初の洪武九年(一三七六)に至って陶宗義(出没年代不明)が編纂したものである。 管見の及ぶ限り「龍卦」の出典は不明。前掲の岩波古典大系には書家の伝記である『書史会要』にこの典故がみえ
- みえるという。静慈圓「弘法大師の上表文における文章構造の特色(上)」(『密教文化』第一一四号、一九七六年)そ 静慈圓によれば、「龍卦」についてこの指摘を踏襲するが、「亀文」については漢代の緯書『尚書中候』にこの故事が
- 4 岩波古典大系は「有諺曰」とあるが、筑摩空海全集は「諺曰」とする。 井実充史「『性霊集』にみえる王国の理念と表現」(『人間発達文化学類論集』第六号、二○○六年)その一一一頁。
- 6 着していたことがわかる。 本稿の趣旨から逸脱するので詳述しないが、「茶湯坐來」とある所から平安初期の日本にも喫茶の文化がある程度定
- 7 庾肩吾の文章は、唐代初期編纂の『芸文類聚』巻七十四「巧芸部」の「書」の項目に収録されている。
- (8) このように鍾繇と張芝のそれぞれの故事が並列してあるのは、空海が孫過庭(六四八~七〇三)の著した書論 譜』(六八七)の冒頭部分の内容を踏襲したのではないかと考えられる。丸山猶計が指摘するように、『書譜』は早く から日本に伝わっていた。(丸山猶計「王羲之と日本の書」(九州国立博物館図録『特別展 王義之と日本の書』西日
- 9 中谷征充『漢詩を通じて弘法大師空海の生涯を繙く』(高野山出版社、二〇一一年)その一三六頁。

本新聞社、二〇一八年)その一三頁。

- (1) 『篆隷文体』(京都・毘沙門堂門跡所蔵、重要文化財)の影印版は、一九三五年、古典保存会より刊行、 孝雄。また近年は、興膳宏『合璧詩品・書品』(研文出版、二〇一一年)にも各書体部分の図版が掲載されている。 解説は山田
- (11)「花」字は岩波古典大系による。筑摩空海全集では「華」字に作る。